

# オランダの小学校における英語教育の特徴とその意味

## —フリースランド州における多言語教育—

### The Characteristics of English Education in the Netherlands

#### —Multilingual Education in the Province of Friesland—

栗原 浪絵

Namie KURIHARA

*Keywords* : multilingual education, minority language, Friesian, immersion, trilingual

キーワード : 多言語教育、マイノリティ言語、フリジア語、イマージョン、トリリンガル

## はじめに

チューリップと風車の国、オランダ——その国が今、教育や福祉という点から注目され始めている。2007年のユニセフの調査によれば子どもたちが幸せを感じる比率が最も高い、いわゆる「世界で一番、幸せな子どもたち」と言われ、オランダの教育制度や保育のあり方が日本にも紹介されるようになってきた<sup>1)</sup>。一方、オランダの子どもの学力、とりわけ、英語力や読解力が高いことは意外に知られていない。宿題や塾がないと言われるオランダにおいて、なぜ、子どもたちは高い英語力や読解力を身に付けることが出来るのか。そこではどのような教育が行われているのだろうか。

オランダの教育について精力的に研究を続けているリヒテルズ直子によれば、移民社会、オランダを支える教育の原理は「自由」と「寛容」にある<sup>2)</sup>。そしてオランダ市民たちの「自由」と「寛容」を支えるための重要な要素の一つとして、多言語教育が実践されているという。とりわけ、中等教育段階では、3つから4つの言語を学ぶのは当たり前となっている。一方、初等教育における英語の導入は十歳前後と決して早くはないものの、多言語を身に付けるための準備段階として効果的な教育が行われているという。オランダの英語教育について継続的に考察している林桂子は、多言語教育を具体的に実践する初等教育として、ロッテルダムの小学校とフリースランド州の小学校を紹介している<sup>3)</sup>。子どもたちはどのようにして3つの言語を身に付けていくのだろうか。本稿においては1998年に開始されたフリースランド州の小学校における多言語教育に着目し、その教育観の根幹とその意味について考察することを目的としている。

先行研究において、フリースランド州の多言語教育について、その社会的な背景や教育観、

及び教育の具体的なあり方について詳細に分析したものは見当たらない。先に触れたように、オランダの英語教育については林桂子が継続して議論を続けているが、フリースランド州の小学校については英語教育という観点から、簡単に紹介するにとどまっている。対照的に本稿においては英語教育という視点を中心軸に据えつつ、小学校全体を支える教育の原理、及びフリースランドの歴史的・社会的背景にも注目して、考察を始めることにしたい。

本論文の課題は以下の3つである。第1にフリースランド州の小学校における言語教育の特徴について、その地域の独自性や言語の特徴に着目して探ること、第2に1998年に始まった多言語教育の概要と教育観を明らかにすること、第3に多言語教育のプロジェクトにおいて、英語がどのように導入され教えられているか、考察することである。主な資料としては、フリースランド州が公開している公的な機関の文書を用いることにしたい。

## 第1節 フリースランド州の小学校における言語教育

### 〈フリースランドの歴史〉

まずはフリースランドの地理的条件について確認しておきたい。フリースランドはオランダ北部の州で、面積はオランダの12州の中では最大である。北は北海に面し、西はアイセル湖を挟んで北ホラント州と向かい合っており、自然に恵まれた場所である。フリースランドでは州の5分の1が湖水で占められており、恵まれた自然のおかげで水上スポーツやスケートなどが盛んである。海や水との関わりが強いために、フリースランドでは歴史的に漁業や農業が中心的な生業となってきた。さらにフリースランドでは広い牧草地と豊かな自然を利用して、牧畜や酪農も重要な産業となっている。

フリースランドがオランダの他の地域と異なるのは、オランダ語の他にフリジア語も公用語とされていることだろう<sup>4)</sup>。人口はオランダ総人口の4%に当たる60万人を超えており、その内94%の住民がフリジア語を理解できる。そしてさらに74%の住民が少数言語を話すことができるという。この数字はフリジア語の稀少性を考えるとかなり高い値と言えるのではないか。着目したいのは、相当数の住民がフリジア語を理解できるという状況が、1980年代以降も変化していない点である。このことを考えても、フリジア語がいかに州内の言葉として安定した地位にあるかが分かる。フリースランド州の大多数の人々がフリジア語を理解できるだけでなく、オランダ語話者の85%を超える人々がフリジア語を理解できるというのも、注目に値する。ちなみにフリジア語は、オランダだけでなく、ドイツの北海沿岸にまたがるフリースランド州やフローニンゲン州などでも話されている。

フリジア語は系譜的に見れば、インド・ヨーロッパ語族の中のゲルマン語派に属し、さらに英語・オランダ語・ドイツ語などと共に、下位の西ゲルマン語族に属している。教育という観点から見て重要なのは、フリジア語はオランダ語と近接な関係にある上に、現在使われている言語の中では、最も英語に近い言語とされている点である。つまり、子どもたちはフリジア語にオランダ語、英語の3つの言語を学ぶといっても、相互に関連のある言語を比較的、楽に学

べるということになる。

しかしフリジア語がフリースランド州の教育において常に尊重されてきたわけではない。そもそもフリジア語は近代において、「百姓の言葉」として蔑まされてきた<sup>5)</sup>。フリースランド州においては、公的な場所や公的な文書において常にオランダ語が優先されてきたのである。このような事態はいわゆる第2次世界大戦後の「フリジア運動」(de Fryske Beweging)によって変化し始める。オランダの中央政府が法廷におけるフリジア語の使用を禁止したのに対して、フリースランドの民衆はこれに抗議し、立ち上がった。こうしてフリースランド州の省庁においてはフリジア語やフリジア文化の保護と促進が求められるようになっていったのである。

マスメディアによってフリジア語を普及させていくという側面も見逃すことは出来ない。ラジオ放送ではニュース、教育、文化、スポーツ、お知らせなどをフリジア語で放送しているという。またフリジア語の日刊新聞はないが、週刊誌のFrysk en Frijはフリジア語で身近な話題を提供している。さらにフリースランド州の州都、レーワルデンにはフリジア博物館、フリジア文学館などが存在し、フリジア語やフリジア文化に関するさまざまな資料が公開されている。

地方の言語と文化を守る—フリースランド州においてこの重要な任務を担っているのが、1938年に設立された「フリスケ・アカデミー」(Fryske Akademy)である。文学・歴史・言語学などに関わる書籍を主にフリジア語で出版し、特にフリジア語の辞書の編纂も精力的に行っている。重要なのは、第3節で扱うことになる多言語教育のプロジェクトがこのフリスケ・アカデミーによって作られたという点である。未来の英語教育に関するプロジェクトが、地方の言語と文化を尊重し促進する教育機関によって創造されたということは、注目に値するだろう。

### 〈フリースランド州の教育を支える原理〉

このように見てくると、第2次世界大戦後いかにフリジア語やフリジア文化を守る努力が重ねられてきたかが分かる。しかし、学校教育の中でそれらは重要な位置を占めてこなかった。初等学校で実際に正課として教育するようになったのは、1980年代以降、4歳から6歳の子どもたちに対して、週に30分から45分に限られていた。当初はフリジア語の教師も不足しており、フリースランド地方自治体教育センターが教員養成や教材作成を積極的に行っていた。

確認したいのは、フリースランド州の子どもたちの言語能力が必ずしもオランダの他の地域の子どもたちと比較して低かったわけではないという点である。フリジア語、オランダ語、英語、どの言語も他の地域の子どもたちと比較して大きな差異はなかった。しかし、フリスケ・アカデミーの研究者、ヨツマ(Ytsma)が指摘しているように、フリジア語の学習には「あまり気が進まない」子どもたちが多かったという<sup>6)</sup>。

次に、フリースランド州の小学校では一般的にどのような英語教育が行われているのか、見

ていくことにしよう。先に見てきたように、フリースランド州の子どもたちはフリジア語の学習には必ずしも積極的ではないという。しかし一方で、英語の学習については「好き」と答える子どもたちが多い。その一因としては、テレビ、ビデオ、音楽、映画、インターネットなどを英語で視聴できることの影響が大きいと考えられる<sup>7)</sup>。

注目したいのは、地域としては独自の文化や歴史を持つフリースランド州ではあるが、オランダの他の地域と共通した英語教育が行われている点である。どのような英語教育が行われているのか、1998年にオランダの教育機関、「国立カリキュラム研究所」(SLO) が提起した文書を基に見ていくことにしよう。

「初等学校において英語を提供する目的は、一方では低年齢で外国語に親しませることにある。他方で英語は、重要、かつ国際的な言語であることにも注意が払われる必要がある。…子どもたちは日常生活を起点にして英語を話すことや読むことの基礎を身に付けていく。それゆえに子どもたちは語彙の習得から始めて、文章構造を理解し、言葉の意味が発見できるようにならなくてははいけない。」<sup>8)</sup>

上記の文章からは、初等学校における英語教育の要諦が外国語に「親しませる」ことから始まり、「国際的な言語」としての英語への認識にまで至る道筋が見て取れる。

オランダの初等学校における英語教育の目的を定めているSLOとはどのような機関なのだろうか。『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』の著者、リヒテルズ直子によれば、SLOは「個別教育のために必要となる教材やカリキュラムの開発を目的として作られた研究所」である<sup>9)</sup>。重要なのは、SLOが研究所の研究者だけでなく、大学などの様々な分野の専門家が協力して、本格的に教材やカリキュラムの開発に従事した点にある。そして研究の成果は、言語、外国語、自然科学、人文科学、進路指導などの内容ごとに、学習教材セットのモデルという形で提示されたのである。

さらに確認しておきたいのは、SLOはオランダのすべての学校で一様に使われる「最善の」モデルを作ることを目指していたのではないということである。あくまでもSLOは一般的に参考になるモデルを作り上げた上で、地域の実情に合わせた実施を求めていたのである。このようにしてSLOは学校現場や教育産業界からの要請に応じて、現場の状況や個別の子どものニーズに合わせて教材を選択できるための組織として発展していった。

オランダの初等学校における英語教育の目的について、もう少し具体的にみてみよう。SLOの提示した英語教育の目的は、以下の5つに集約される。

- 子どもたちは日常生活に関する簡単な会話を理解できるようになる必要がある。
- 子どもたちは個人的な情報について、食べ物や飲み物について、身の回りの生活や時間についての会話を理解するために、十分な英単語を理解しなければならない。
- 子どもたちはお互いに日常生活について話すことができるようにする必要がある。発音は理解可能でなければならない。

- 子どもたちは簡単に書かれた文章の主要な内容を理解できなければならない。
- 子どもたちは言葉の意味を理解するために、辞書を使うことができる。<sup>10)</sup>

上記の3つ目までの目的は、子どもたちが「日常生活について話す」など、基本的なことをマスターするような目的に絞られている。しかし、4つ目、5つ目の目的は書かれた文章を理解する、辞書を使うなど、かなり知的で洗練された内容となっている。つまりオランダの初等学校では〈聞く、話す〉などの基本的な事柄からスタートしながらも、書かれた文章を理解する、辞書を用いるなどの発展的な内容も子どもたちに学ぶことができるように求められているといえる。ここには本格的な英語教育を目指すオランダの教育観の中心軸が見て取れる。

## 第2節 新しい多言語（トリリンガル）プログラム—1990年代の動向

ここで画期的、かつ「成功した」プログラムと言われる新しい多言語プログラムについて見ていくことにしよう。この3ヶ国語プログラムを指導しているのはフリスケ・アカデミーとフリジア語を担当している教育機関、「フリースランド地域教育機構」(GCO)である。このプロジェクトは1997年に始められ、当初は5つの初等学校から実験に始められたという。このプロジェクトを採択しているのはほとんどがフリジア語を使用している地域の学校である。2000年にかけて、このプロジェクトに参加する学校は徐々に増えていった。

着目したいのは、この時期、ヨーロッパ全体でヨーロッパ連合(EU)の創出した言語教育政策を意識して英語教育が行われていたという点である。1990年代から2000年にかけてはヨーロッパ連合(EU)がその結び付きを強め、多様な文化や歴史を認めるために関心を深めた時期でもあった。2001年には「欧州言語共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages)が提示され、学習者の能力の評価にあたって、共通の基準が示されたのである。ここで着目したいのは、CEFRを支える基本的な考え方、「複言語主義」(plurilingualism)である。従来の「多言語主義」(multilingualism)が複数の言語をそれぞれ母語並みに習得することを目指したのに対して、「複言語主義」では多様なレベルの言語能力を肯定的に捉え、効果的で多様なコミュニケーションのあり方を追求しようとしたのである。このような状況と機を同じくして、フリースランド州の多言語教育は創出され、準備されてきた。

さらに、フリースランド州の多言語教育の背景を考える上で見逃せないのは、2001年が欧州議会とEUによって「欧州言語年」と定められたことである。この年は、多様な言語のあり方を認め、生活のあらゆる場面で言語を学ぶ機会を奨励しようとする記念の年とされたのである。特に、地域・国家・国際のそれぞれの言語政策に関する会議の開催、「地域言語および少数言語に関する欧州憲章」(European Charter for Regional or Minority Language)を周知させるための運動などは、フリジア語・オランダ語・英語の3つの言語を学ばせる多言語教育の原理のまさに根幹にあったと考えられる。

このプロジェクトはバイリンガル教育の3つの原理に基づいて始められた。第1に、「付加的



バイリンガリズム」(additive bilingualism)である。これは第2言語を学ぶことが第1言語の習得を後回しにした上で成立するのではない、ということである。このプロジェクトの場合で言えば、マイノリティの言語であるフリジア語が十分に尊重されねばならないということである。第2に、「言語の相互依存」を最大級に利用するという原理である。フリジア語、オランダ語、英語はお互いに類似している言語として、身に付けていくことが可能である。確かに言語距離が近いことは混乱を招くこともあり得るが、この場合はむしろこの言語距離の近さを積極的にとらえて、読解力につなげていこうとするのである。子どもたちの言語能力を読解力へつないでいく指導の方法は、いずれ熟考に値するだろう。第3に、「内容重視指導法」(content-based instruction)である。つまり、言語を教え込むのではなく、教える内容や意味を優先して言葉を身に付けていくのである。

上記の3つの原理に基づいて、どのようなクラス編成が行われるのか。以下の4つの原則を見ると、いかにこのプログラムがよく練られて作られているか、が分かる。

- 1) 授業の際には、マイノリティの言語が少なくとも50%以上使われる。
- 2) どの授業の時間にも1つの言語のみが使われる。
- 3) クラスの中にはそれぞれの言語を話す子どもたちの多数派、少数派がバランスの良い数で存在する。
- 4) すべての授業で両方のタイプの話し手がいる。

この4つの原則を見ると、3つの特徴を読み取ることが出来る。第1に、マイノリティの言語—この場合、フリジア語—が重んじられているということ、第2に、子どもたちはそれぞれの使う言語によってバランス良くクラス編成されているということ、そして第3に、1つの授業の中で2つの言語が使われるということではなく、1つの言語に絞られているということである。つまり、得意な言語が異なっている子どもたちは、お互いに学び合うことが出来る一方で、授業の中では言語を混ぜ合わせることはなく、1つの言語に集中できるということなのである。

では、具体的に3つの言語、つまりフリジア語、オランダ語、英語はどのようにして初等教育レベルで導入されるのだろうか。まず、G1～G6、つまり最初の6年間は基本的にフリジア語とオランダ語の2つの言語のみで教えられる。この際、最も注目したいのは教科として指導するだけではなく、さまざまな教科を教える際の言語、すなわち「イマージョン」(immersion)の形で教えられているということなのだ。「イマージョン」の形式で教えられるということは、子どもたちはある言語「を」学ぶということに集中するのではなく、ある言語「で」学ぶことができるということになる。特定の言語を授業の中で行われる具体的な活動の中で習得していくという点では、「イマージョン」は最適といえよう。

さらに注目したいのはフリジア語、オランダ語が交互に一週間ずつ、まとめて教授言語とし

で使われるという点である。このやり方では同じ内容を二度、教えるということになってしまうのか、危惧したくなるが、その点は内容や教材に重なりがないように注意が払われているという。むしろ、一週間ごとに教授言語を変えることで、たとえどちらかの言語で教科の内容についていけないことがあったとしても、子どもたちは次週に補足することができるのではないかと推測される。

最後にフリジア語とオランダ語を教える教員について。基本的にフリジア語の教員は子どもたちに対してフリジア語を話し、オランダ語の教員は必ずオランダ語を話すことになっている。この原則については先に確認した通りだが、このやり方を一貫させることで、子どもたちはある先生に対してある言語を話すという態度を決めることができる。一つの言語を一人の教員が話し続けるということは、子どもたちの言語の切り換えにとっては効果的といえよう。

「成功している」と言われている多言語教育のプロジェクトであるが、問題がないわけではない。一番の課題となっているのは英語を使用する教師のレベルが十分か、ということであるという。フリースランド州の先生たちは英語を教科として教えることは出来ても、他の教科を教える際の言語として使用するには限界があったという。この問題を解決するために、1998年には早速、先生たちのための新しい英語教育のプログラムが誕生した。先生たちはオーラル・コミュニケーションの能力を伸ばすための英語準備コースに参加出来るようになり、さらに教員養成学校の学生たちは英語圏のカレッジで訓練を受けられるようになったのである。このような迅速な対応を見ても、いかにこのプロジェクトが「成功」に向かっているか、が分かるだろう。

### 第3節 英語の導入—「イマージョン」(immersion) の教育

それでは子どもたちにとって3つ目の言語となる英語はどのように導入されるのだろうか。G1～G6までオランダ語とフリジア語の訓練を受けた子どもたちはG7、G8になるといよいよ英語の授業を開始する。注目したいのは英語を開始する際にも「イマージョン」の形で導入されるということである。ちなみに全教科の20%が英語で行われている。

このプロジェクトの骨子は「言語の学習 (language learning)」が「言語の使用 (language use)」に取って代わるということであろう。しかし、これはまるで英語に触れたことのない子どもたちには、かなりの負担を強いることになるかもしれない。したがって、このプロジェクトではG7で授業を開始する前の一年間に、「世界についての学習」や「創造的芸術」の授業で用いる単語や文章を学ぶ時間が設定されているという。

英語を使う教科は「世界についての学習」(world studies)と「創造的芸術」(creative arts)の2科目である。現代の世界で問題になっている時事的なテーマを学ぶ「世界についての学習」という科目の性質上、英語を使用するのは意味が大きいといえよう。一方、「創造的芸術」のほうはどうだろうか。例えば、G7やG8レベルになると物理や数学などの教科を英語で行おうとすれば、論理的・数学的に高度な内容を要求されることになるだろう。こう考えると、〈描く、

作る)などの活動を中心とする「創造的芸術」の授業で動作や作業に関する指示や表現を英語で学ぶのは、自然な活動や行為の中で言葉を獲得していく可能性の高い子どもたちにとって、最適といえよう。

これまで見てきたように、フリースランド州における多言語プロジェクトの中心軸はG7、G8という比較的高い年齢になって英語の学習が開始されることにある。これを「遅延イマージョン (delayed immersion)」と呼んでいるのだが、このように比較的ゆっくりと英語を導入することの意味はどこにあるのだろうか。

まず第1に、子どもたちの「動機付け」(motivation) がはっきりしてくることがあげられる。10歳前後の年齢になって英語を開始することで、よりはっきりとした目標を子どもたちは設定することが出来るだろう。学習する内容もより高度なもの、より論理的なものと連携しやすくなる。第2に、2つの言語が容易に交り合わず、混乱しにくいということもあげられる。子どもたちは2つの言語の基礎をしっかりと固めた上で、英語に触れることができるのである。第3に、そしてこの点が最も重要と思われるのが、まずフリジア語とオランダ語を定着させることによって、日常生活を重視し地域の力を信じるという価値観を伝えることが出来るということである。ヨーロッパの多言語教育の中核はまさにこの点にある。幾つもの言語を安易に習得させようとするのではなく、子どもたちの住む地域を出発点としながら、さらに国際的な言語へ発展させていくのである。

もちろん「遅延イマージョン」に欠点がないわけではない。例えば発音、音声に関してはもっと低年齢から始めたほうが身に付きやすいといえる。日常生活と関わる初歩的な単語も低年齢のほうが導入しやすいだろう。「イマージョン教育」を比較的、ゆっくり始めることの是非については持続的に考察していく必要があると思われる。ところで、このように英語を比較的、高い年齢によって導入する方法はどの多言語教育においても共通な方法ではない。例えばスペインのカタロニア地方では、低学年の段階で英語教育を開始し、3つの言語を同時に学んでいる。そしてこの多言語教育も「成功している」という。他にもフィンランド、スイス、ベルギーなどの多言語教育と比較して、このフリースランド州の多言語教育を位置付けることは、いつから英語教育を始めるのか、そしてどのような英語教育を始めるのか精査して考えるという点で重要であり、今後の課題といえよう。

## おわりに

ここまでオランダのフリースランド州における多言語教育について分析してきたが、このプロジェクトから私達は何を学び得るのか。フリースランド州における多言語教育のプロジェクトは、フリジア語とフリジア文化を守るという地域の歴史と教育原理に支えられたものであった。そしてそれを根幹で支えているのは、地域の実情に合わせた教育を認めるオランダの教育観であった。1998年に始まったこのプロジェクトはグローバル化への対応の一つとして生まれたものであったが、地域や国家の言語を学びつつ、子どもたちは地球市民として生きる視点を



獲得していていると考えられる。

最後に、日本の英語教育への示唆として、以下の3点を挙げておきたい。

- ①英語教育と母国語教育が互いに浸食し、衝突し合うものとは見なさずに、むしろ両者が相関し、良い影響を与えるものとして考えること。
- ②英語教育を「イマージョン」の形式で導入する前に、一年間の準備期間を置くなど、細かい配慮が行われていること。マイノリティの言語を話す子どもたちとそれ以外の言語を話す子どもたちのバランスを考えてクラスを構成するなど、クラス編成の点でも細かい配慮が行われていることに注目したい。
- ③言語そのものを分析的・体系的に学ぶというよりは、「イマージョン」という形で授業の中で実際に使いながら言語を学んでいくこと。もちろん、「イマージョン」教育には長所と短所があるだろうが、これまで見てきたように段階を踏んで新しい言語を増やしていていることを確認しておきたい。

日本でも公立小学校において「外国語活動」、すなわち英語の授業が導入されてから、2年の歳月が過ぎた。2013年の現在、問題になっているのは、「グローバル人材」を育成するために「外国語活動」ではなく正式な「教科」として小学校でも英語教育を始めること、さらに低学年から英語教育を始めることの意味である。このような主張を繰り返す、いわば英語推進派に対して、小学校の英語教育を促進することに対して慎重な態度を取る英語慎重派も少なからず存在する。このような議論で必ず問題になるのが、国語が大切か、それとも英語が重要かという視点である。しかしオランダの英語教育を調べていくと、子どもたちの日常に関わる言語を出発点としながら、国際的な言語へとつなぐ順路が自然にそして慎重に準備されていることが分かる。ここでは〈言語の教育〉という大枠が、地球市民として生きる子どもたちの教育の根幹に据えられているといえよう。

## 【註】

- 1) 例えば、辻井正『世界で一番幸せな子どもたち オランダの保育』（2009）などがある。
- 2) リヒテルズ直子『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』（2006）
- 3) 林桂子「第4章 オランダ」大谷泰照他（編著）『世界の外国語教育政策・日本の外国語教育の再構築にむけて』（2004）
- 4) Ytsma, Trilingual primary education in Friesland, 2005
- 5) 児玉仁士『フリジア語文法』（1992）
- 6) Ytsma, Ibid., 2005
- 7) 林桂子「外国の事例からみた小中連携」（2007）
- 8) SLO, 1998
- 9) リヒテルズ、2006
- 10) SLO, 1998
- 11) Ytsma, Ibid., 2005
- 12) 林、2004

## 13) 大谷恭照編『EUの言語教育政策』（2010）

## 【参考文献】

- Bonnet, G. (ed.) (2002). The assessment of pupils' skills in English in eight European countries. *A European project*. Retrieved August 31, 2013, from [http://cisad.adc.education.fr/revampdf/assessment of english.pdf](http://cisad.adc.education.fr/revampdf/assessment%20of%20english.pdf)
- ベーカー C. (著)、岡秀夫 (訳・編) (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- Essen, A. J. van (2000). Language teacher training and bilingual education in the Netherlands. Retrieved August 31, 2013 from <http://www.fu-berlin.de/elc/tnp1/SP6NatRepNL.doc>
- 秦野悦子 (編) (2001) 『ことばの発達入門』大修館書店
- 林桂子 (2004) 「第4章 オランダ」大谷泰照他 (編著) 『世界の外国語教育政策・日本の外国語教育の再構築にむけて』東信堂.
- 林桂子 (2006) 「オランダの多言語教育からのヒント」『英語教育』2月号. Vol. 54, No. 12.
- 林桂子 (2007) 「外国の事例からみた小中連携のあり方」『小学校と中学校を結ぶ—英語教育における小中連携』(共著: 松川禮子・大下邦幸編) 高陵社
- 岩立志津夫、小椋たみ子 (編) (2005) 『よくわかる言語発達』ミネルヴァ書房
- 児玉仁士 (1992) 『フリジア語文法』大学書林
- リヒテルズ直子 (2004) 『オランダの教育』平凡社
- リヒテルズ直子 (2010) 『オランダの共生教育』平凡社
- リヒテルズ直子 (2006) 『オランダの個別教育はなぜ成功したのか イエナプラン教育に学ぶ』平凡社
- 三浦信孝 (1997) 『多言語主義とは何か』藤原書店
- 大谷泰照編 (2010) 『EUの言語教育政策』くろしお出版
- SLO (1998) Home Page Stichting Leerplan Ontwikkel
- 辻井正 (2009) 『世界で一番幸せな子どもたち オランダの保育』オクターブ
- Ytsma, Y (2005). Trilingual primary education in Friesland, The Netherlands. Retrieved June 3, 2013, from <http://www.euroclit.net/inhoud/cfiles/pdf/netherlands.pdf>

(平成25年11月6日受理)